

緑化部研修会資料

内容

- ・パンジーの種まきと苗作り

日程

- ・ 9 : 0 0 ~ 9 : 5 0 講義
- ・ 1 0 : 1 0 ~ 1 1 : 0 0 実習

日時 平成27年8月21日（金）

場所 岡崎市立上地小学校

主催 岡崎市現職研修委員会緑化部

○種の基礎知識



◆低温貯蔵

「発芽に適した気温になった」と種に自覚をさせると発芽率がよくなります。そのために、種を購入してきたら、冷蔵庫に入れておきます。これを、低温貯蔵と言います。発芽率がよくなると同時に、種が一斉に発芽して生長するため、何日かに分けて鉢上げをする必要がなくなります。

◆プライマックス (PRIMAX)

種の発芽率を向上させるための処理のことをプライミングと言います。この処理が行われた種をプライマックスと呼んでいます。プライミングには、次の効果があります。

- ① 発芽速度が向上し、一斉に発芽する。
- ② 発芽温度の範囲が広がる。
- ③ 種子に休眠の覚錯をもたらす。

◆品種名（パンジー【プロント ミックス】）

パンジーは長日性のため、花は冬至以降にしか咲きませんでした。しかし、20年ほど前に秋・冬・春のスリーシーズンにわたって咲き続ける「LR（ロングラン）」が開発されました。プロントシリーズはLRのため開花が早く、春まで咲き続けます。花径約7cmの中輪で、ブロッチ（目）の入った花がコンパクトな草姿に鮮やかに咲きます。

耐寒性（0℃以下の気温に耐えることができる性質）があり、冬の低温短日照の悪い条件下でも春まで咲き続けます。

早生性（種まきをしてから開花までの期間が短い性質）が強く、丈夫で育てやすい品種です。プロントシリーズは、9月初めに種をまくと、11月上旬に開花する60日開花タイプです。

ミックスですので、9色（スカーレット、ローズ、イエロー、ブルー、マリナーナ、レッド&イエロー、レモン、ホワイト、シフォン）の花の種が混じっています。

◆キャプタン（1回）処理済

種の殺菌処理です。

◆発芽率

発芽率を100%にすることは、難しいものです。袋には、発芽率80%以上と記載されていました。この種をまいたところ、実際の発芽率は95%でした。翌年にまくと、発芽率は下がりますので、購入した種はその年にまくことが大切です。

※F1（エフワン）

「花の3P（ペチュニア・プリムラ・パンジー）」は品種改良が積極的に行われています。そのため、販売されている種のほとんどがF1種です。F1種は一代限りで、二代目の種は親とは全く違った形や性質をもっているなど、同一品種としての特性を保持していません。

※ホームページ（パンジー LR プロント シリーズ）

一般向け <http://www.sakataseed.co.jp/product/search/id1884.html>

プロ向け <http://www.sakataseed.co.jp/product/search/id1885.html>

○種まき・発芽

◆適切な土（水分・空気）

種が発芽するためには、適切な気温・水分・酸素（空気）が必要です。そのため、種まき用の土は、「水をしっかり吸収できる」「酸素をしっかりと含むことができる」という二つの要素が必要です。プライムミックスという商品名の播種専用培土を使うと、発芽率がよく、その後の管理が楽です。一袋が大きいいため、使い残しは乾燥に気をつけることが大切です。

◆手順

- ① セルトレイに播種専用培土を入れ、水を十分にかけます。
- ② セルトレイを地面に軽く落として、播種専用培土を沈めます。
- ③ 沈んだ部分に播種専用培土を追加し、①②を繰り返します。
- ④ セルトレイの一つ一つのセルの中心に種を置いていきます。
- ⑤ セルトレイ全体を、新聞紙（3枚）で包んで日陰に置きます。セルトレイを新聞紙で包んでいる間は、水遣りをする必要はありません。
- ⑥ 1週間ほどすると種が動きますので、新聞紙を取り除きます。この時期を見極めることがとても大切です。この作業が2日遅れると、苗が徒長してしまうので、その後の管理が難しくなります。
- ⑦ 新聞紙を取り外してからは、土が乾いたときに水遣りをします。セルトレイを手で持ち上げてみて「軽くなったな」と感じた時に、水遣りをします。過保護は禁物です。水遣りの回数を控えることが、立ち枯れ病などを防ぐこととなります。
- ⑧ 生長と共に、苗を日光が当たる場所に移動します。苗は、日光が当たることによって生長するからです。ただし、鉢上げをするまでは、雨がかからないようにします。
- ⑨ 発芽に肥料は必要ないので、播種専用培土には微量の肥料しか入っていません。発芽してからは肥料が必要ですので、葉の色が「濃い緑色」ではなく、「黄緑色」になり始めたら、液肥を与えます。

◆備考

- 種 PRIMAX@（プライマックス処理）1,000粒入り）3,780円
- 苗 ラントップ@マーク苗 512穴セルトレイ（450本保障）5,198円
- ※ 種苗店やJAなどを通じて2月1日に受注を開始し、種は6月上旬、苗は8月上旬に出荷開始。

○鉢上げ

◆手順

- ① 本葉の数が3枚（発芽してから3～4週間後）になったら、鉢上げに適した時期となります。苗を徒長させないためにも、隣同士の苗の葉が振れ合う前に鉢上げをする必要があります。早く生長させたい場合は、本場が2枚の時点で鉢上げをすることもできます。

セルトレイの裏側の穴に細い棒を差し込むと、簡単に苗を取り出せます。本葉の数が6枚程度になっていて、根がしっかりと張っていれば、苗の根もとの茎をもって引っ張り上げることで取り出せる場合もあります。

- ② 鉢上げ用のポットは、3号ポットを使います。1号が1寸（約3cm）ですので、3号ポットは直径が9cmです。

- ③ 土は、培養土を使用します。培養土とは、花を栽培する土のことで、基本的に肥料は入っていません。ですから、購入してきた土に元肥となる牛糞などの肥料を入れます。最近は、肥料入りの培養土もありますので、品質表示を見て購入することが必要です。なお、「土太郎」という肥料入りの培養土を使うと、育ちがよいようです。この培養土は、花壇の土と（1対1の割合で）混ぜて使用することもできます。

- ⑤ 葉の色を見て追肥をします。追肥としては化成肥料が便利です。1つのポットに10-10-10（-1）という肥料を3粒与えます。鉢が5号鉢であれば、5粒与えることとなります。

○定植

◆土づくり

花の根は、20～30cmほど伸びます。土が悪いと、10cmほどしか伸びません。よい土とは、保水性と通気性がよい土です。そのため、腐葉土や赤玉土などを混ぜて土づくりをします。

◆元肥

パンジーやサルビアの生長には、多くの肥料が必要です。肥料の主な成分は、「窒素」「リン酸」「カリウム」です。「窒素」は茎や葉の成長、「リン酸」は花の開花や結実、「カリウム」は根の生長に関係します。そのため、牛糞などの元肥と呼ばれる肥料を土にすき込む必要があります。

一方、マリーゴールドやアゲラタムなどは、「窒素」を多く含んだ肥料（糞系の肥料）を与えると、6～7月に花を咲かせます。その後も生長を続け、8月以降は花が咲かなくなります。11月に入る頃に、やっと花を咲かせ始めますが、自分の茎の重みで茎が折れたり倒れたりしてしまいます。ですから、花の種類によって土づくりを変える必要があります。

◆苗の間隔

植物は、咲いた花が目立つように生長をします。ですから、苗と苗の間隔を広くすると苗の背丈が低くなり、間隔を狭くすると背丈が高くなります。

○花の管理

◆水遣り

発芽後は水を控え、徒長や立枯病を避けることが大切です。夏は1日に回、春と秋は1日に1回、冬は2～3日に1回、たつぷりと水遣りをするのが基本です。ただし、土が湿っている時は水遣りをする必要はありません。

◆追肥

葉の色が黄緑色になったら、追肥をします。基本的には、液肥を与えるとされています。しかし、これは骨の折れる作業です。液肥の代わりに、固形の化成肥料を与えると、作業が楽になります。

◆消毒

病虫害対策として、薬剤を散布します。薬剤には、1年間の使用回数が定められている場合がありますので、気をつけてください。また、薬剤だけを散布すると、水遣りで薬が流れ落ちてしまいますので、薬剤に展着剤を混ぜる必要があります。被害は、毎年同じ時期に発生することが多いため、その記録を残しておき、被害を受ける前に薬剤を散布すると効果的です。

◆花がら取り

咲き終わった花がらをそのままにしておくと結実をしいし、次のV花が咲きにくくなります。ですから、葉がらを摘み取ることが大切です。

